

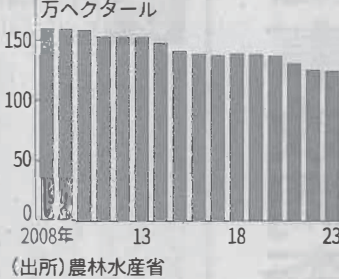
コメ高騰、昨夏猛暑が直撃

コシヒカリ卸値6〜8割高

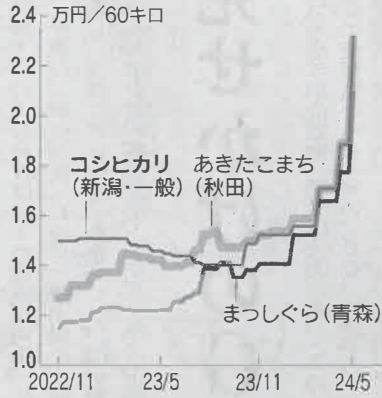
訪日客消費増も影響

コメの卸会社が取引する価格は5月以降、代表的な新潟産コシヒカリが前年同期比で6割高と、約13年ぶりの高値をつけた。8割高の銘柄も登場。2023年の猛暑でコメの品質が低下したことで、流通量が減ると同時にインバウンド(訪日外国人)回復で需要が膨らみ、品薄感が強まった。

コメの生産は減少傾向が続く
(主食用米の作付面積)



新潟産コシヒカリは13年ぶり高値
(卸間の取引価格)



JAグループの全農など卸会社にコメが収穫シーズンに作付け状況や需給見通しなどを判断材料にして農家からコメを買い取る価格を(概算金)を7〜9月に決めて決める。これがコメの基準価格になる。全産コシヒカリの卸価格は

1俵(60kg)2万3150円前後。前年同期から約8650円上昇した。東日本大震災の影響で供給懸念が出た11年9月以来の高値だ。秋田産あきたこまちの卸価格は2万3100円前後と、7割上昇している。

政府は18年、米価を維持するためにコメの生産量を調整する減反政策を廃止した。この政策をやめた後も主食用のコメの全国の生産量の目安を示した上で、麦などに転作した農家への補助金を継続しており、コメの作付けは減少傾向にある。ここ23年は猛暑が直撃。

コメが白濁したり、精米加工の際に歩留まりが悪かったりして流通量が少なくなった。コメの需給の指標となる全国の出荷・販売段階の民間在庫量は3月末時点で215万トと前年比で36万ト(14%)少ない。在庫量を年間需要量で割った在庫率は31・6%と5年ぶりの低水準だった。卸会社が競うようにコメを確保する動きが広がった。一部地域ではコメが本当にない。究極にピンチ。こんなの初めてだ。(東京都足立区のスーパー経営幹部)という状況が生まれている。

卸価格の高騰は店頭価格に波及する。全国スーパーの販売データを集めた目録POS(販売時点情報管理)によると、売れ筋の大手卸会社が販売する秋田産あきたこまち(5kg入り)は19日時点の平均店頭価格が1811・8円と前年同期と比べ23・5%高い。

価格上昇に拍車がかかったのは、供給が絞られたタイミングでインバウンド需要が膨らんだからだ。ファミリーレストランで使われることが多い割安な銘柄の一つ、関東産コシヒカリ(千葉県産)の卸価格は、60kgあたり2万2650円前後で前年同期比8割高い。冷夏による凶作の影響で、高値をつけた04年1月以来の水準に上昇した。

飲食店では輸入米を手当てする動きが相次ぐ。主食用米として年間10万トを上限に流通するSB S(売買同時契約)米は政府による23年度の入札では累計6万5532トを卸会社などが落札した。前年の約5倍だ。

インバウンドに人気の牛丼チェーンである吉野家は牛丼などに国産米のみを使用していたが、国産米高騰を受け、今春から国産米と外国産米のブレンドに切り替えた。松屋フーズも新米が出るまでは国産米に外国産米をブレンドして提供することを検討している。

価格の高騰はいつまで続くのか。足元でコメの価格が上がったことで、農家は転作を抑制して主食用の生産を増やすとみられる。9〜10月ごろに収穫される新米が出てくれば逼迫した需給が緩和される可能性がある。

一方、昨年のような猛暑が続く懸念も残る。気象庁による6〜8月の予報では、全国的に平均気温は平年より高い見込み。米穀店スズノブ(東京・目黒)の西島豊造社長は「少なくとも24年産米が出回り始めるまで価格は下がらない」と話す。坂本哲志農相は21日の閣議後記者会見で「主食用米の需給が逼迫しているとは考えていないが、今後は需給や価格の動向を注視する」と述べた。